

# 遠藤周作文芸とキリスト教

——『沈黙』に至る道——

細川正義

一

遠藤周作は一九二三（大正一二）年東京巢鴨に生れ、三歳の時父の転勤で満州大連に移り、一九二三（昭和八）年両親の離婚に伴って帰国し、神戸市六甲の伯母の家に同居するようになった。母親が、離婚の不安と寂しさの中でキリスト教に救いを求めるようになり、遠藤がその母親の進めにしたがってカトリック教会で洗礼を受けたのが一九三五（昭和十）年、遠藤一二歳の時だった。後に遠藤は

小学校のころ、両親が離婚して、母親が離婚した後の苦しさを宗教で満たそうという気もあったんでしよう。母の姉がカトリックだったので、教会に行くようになって、洗礼を受けました。当然、兄と私とはイヤイヤ教会へ行ったわけです。(1)

と回想しているように、彼は母親に無理に入らされたキリスト教がいやでたまらなかった。しかし、元来母親思いの遠藤は、

たぶん私は、母親に対する愛着が非常に強い男なものだから、母親が一所懸命だったものをむげに棄てるとい

うのは、母親に対して申し訳ないという気分が、どこかにあったのです。(略) 自分でも一所懸命にならねばという考えが、どこかにありました。(2)

と述べているように、嫌いでたまらなかつたキリスト教、逃げてばかりいたキリスト教をいつしか真剣に考えるようになり、やがて

母親がくれたこの洋服を、おれの身体に合った和服に仕立て直してみようと考えるようになったのです。キリスト教というのは、私にとっては身によく合わない洋服なのです。(略) このキリスト教を日本人の身体にあつた和服にしてみよう、そして、それができなかつたときは、さようならと言つても、母親が許してくれるだろうという気が、一挙にはなく、少しずつ少しずつ起きてきたわけです。(3)

という、心境になったと回想している。即ち、西洋の、キリスト教中心の精神風土に対して、日本の、キリスト教を受け入れたい精神風土との違いを明らかにするとともに、どのようにすれば、日本という精神風土に於いてキリスト教が根を下ろして、信仰が広まることが出来るかを真剣に考えていこうとする決心に至つたのである。

遠藤は、日本という精神風土にはキリスト教を受け入れない感覚が有ると常々言っている(4)。たとえば、『沈黙』の中で、いわゆる「沼地論」として屢々指摘される「日本という国にはどんな良い苗を持ってきて植えても、根から腐らせてしまふか、全く違つたものに変質させてしまふ」という考え方を示しているが、彼はこのような考え方を早くから一貫して持っていた。

日本にキリスト教が伝達されたのは、古くは一五四九年にスペイン人ザビエルが鹿児島に上陸して以来とされている。ザビエルは二年三ヶ月のあいだ西日本各地で布教活動を行い約七百名の信者をもたせたが(5)、以後、織田信長や豊臣秀吉が一時、キリスト教を奨励したときがあり全国に優れたキリシタン大名や沢山の信者が生まれ、千六百年のはじめには信者は九十万人近くの数に及んだ(6)。そのような歴史があるにもかかわらず、現在日本人の中でキリス

ト教信者の数はカトリックとプロテスタントを合わせても国民の一パーセント弱しかない。遠藤が危惧する「キリスト教が育ちにくい風土」はまさに実証されている。そのような風土に於いて、どのように工夫すれば、即ち遠藤の言葉で言えばどのように「仕立て直す」ことができれば、キリスト教信仰が根付くことが出来るのか、遠藤の課題は、日本の精神風土との対立の中で展開されていたと言いうことが出来る。

では、何故そこまで遠藤はそのことにこだわるのか。そのことを考えるときに浮かんでくるのが、彼が若き日に書いた「カトリック作家の問題」の次の箇所である。

・カトリック作家は、作家である以上何よりも人間を凝視するのが義務であり、この人間凝視の義務を抛擲する事はゆるされない。

・カトリック作家は「人間存在の最も内部的なものを凝視し」「近代生活の額縁におさまった共通な外観の彼方に一人の人間が他の存在におきかえられぬ独自の魂に光をあてる」ために作中人物の魂の秘密、その罪、その悪さを直視せねばなりません。(7)

とのべ、更に「神々と神と」において

カトリック者の本来の姿勢は、東洋的な神々の世界のもつ、あの優しい受身の世界ではなく、戦闘的な、能動的なものです。(8)

として、カトリック作家の義務として人間を凝視し、自らの信仰にたつて人間の「独自の魂に光をあて」、東洋的汎神世界の受け身から脱却することを目指さなければならないと言いうことを表白しているといえる。言い換えると、カトリック作家の責任として宗教と文学の問題を追及し、特に東洋的、そして日本に於ける汎神的風土にあつてキリスト教信仰の可能性を明確に問うていかなければならないという意志が込められたものと言いうことも出来る。そしてそこにおいて一貫した遠藤文芸のテーマが定まったと言いうことも出来るであろう。

註

- (1) 『私にとって神とは』 光文社、一九八三年六月二十五日、六頁。
- (2) 『私にとって神とは』 前掲書、一〇頁。
- (3) 『私にとって神とは』 前掲書、一一頁。
- (4) 例えは「私とキリスト教」(初出誌未詳)一九六三年七月(『宗教と文学』南北社、収録)がある。
- (5) 岸野 久「ザビエル」『日本「キリスト教」総覧』『別冊歴史読本』新人物往来社、一九九六年一月、一三九頁。
- (6) 森 一弘「日本におけるカトリックの歴史」『日本「キリスト教」総覧』前掲書、二四〇―二四五頁。
- (7) 「カトリック作家の問題」『三田文学』一九四七年二月。
- (8) 「神々と神と」『四季』五号、一九四七年二月。

一一

一九五〇(昭和二五)年フランス留学に出発した遠藤は、肺結核発病のため一九五三(昭和二八)年に帰国した。そのことについて後に、次のように述べている。

私は戦後間もなく留学生としてフランスへ行つて、そこで病氣になってしまったのです。(略) こういう病氣になつたのは、西洋の中にゆるぎなく存在しているキリスト教がおれをこんなに圧迫しているからだ、右を見ても左を見ても、教会とかキリスト教とかいふ感じの世界だつたから、それでおれは身体を悪くしたんだ。そこから逃れたほうが身体が回復する、というような感じが強かつたから、その時はキリスト教について真剣には考えませんでした。<sup>(1)</sup>

留学は途中で断念しなければならなかつたが、「西洋の中にゆるぎなく存在しているキリスト教」と直面した遠藤のそのときの留学は、帰国して本格的に作家活動を開始したときに大きな影響を及ぼした。そして、もう一つ大きな出

来事は、帰国した年の十二月、母が脳溢血で亡くなったことである。遠藤が作家として評価されたのは、一九五五（昭和三〇）年七月に『白い人』で芥川賞を受賞してからだ。この『白い人』では、フランス人を父に、ドイツ人を母に持つ主人公が、熱心な清教徒である母による厳しい禁欲主義教育への反発をいつも心に持っている人物として設定されている。そして彼は意識的に悪を試みて、悪が行われれば、その向こうに何があるのかを問おうとしている。しかし、拷問を続けた神学生のジャックが自殺をしてみたため、その向こうにあるものが問えない状態になったところで作品は終わる。悪が存在するなら神も存在する。遠藤が問おうとしたのもその神の実在の問題だったのであるが、母の存在と彼女への反発、そのかなたに神を見ようとする視点に、母から与えられたキリスト教を課題にして出発した特徴であり、母の死を契機に本格的小説を世に出した遠藤文学の特徴を見ることが出来る。

『白い人』の主人公は、ヨーロッパ人で、その彼に課せられた「悪と神」のテーマは、日本とか東洋に限られたことではなく、人間としての根本的課題であった。その路線で遠藤が小説を書き続けていけば、もっとグローバルな作家になりえたかもしれないが、続いて同じ年の十一月に発表した『黄色い人』では、テーマを、黄色い人、即ち東洋人である日本人がその汎神論的精神風土ゆえに西洋のキリスト教や罪の問題が理解できないことで彷徨している姿に視点をさだめて描いている。たとえば次の箇所である。

私はキミコをゆさぶりながら叫んだ。「なぜ、黙っています。わたしはプロウを裏切った。八年の間恵みをかけてくれた男をユダのように売りました。憎みなさい。なぜ、わたしをその眼でみますか」大声をあげて私は嗤わらった。嗤いながら鏡台にうつっている自分の顔に気がついた。

「ごうでもええんよ。どうせあたしには、あなたみたいな西洋人のように教会ってなにか、わからへんし、馬鹿な女ですさかい。」

キミコは、私にゆさぶられて乱れた髪を直しながら呟いた。「なぜ、神さまのことや教会のことが忘れられへ

んの。忘れればええやないの。あんたは教会を捨てはつたんでしよう。ならどうしていつまでもその事ばかり気にかかりますの。なんまいだといえぱそれで許してくれる仏さまの方がどれほどいいか、わからへん。」(「デュランの日記」一二月一八日)

日本人のキミコにとってはキリスト教が絶対的の神ではないので、捨てたのなら忘れればよいといい、拜めば許してくれる仏のほうが良いという。それに対して背教神父のデュランはいつまでも神のことを怯え苦しんでいる。一神論世界と汎神論世界の精神風土の違いをが端的に示された箇所として注目される。そして作品にはもう一人の重要人物千葉が登場し、「黄色人のほくには、繰り返していいますがあなたたちのような罪の意識や虚無などのような深刻なもの、大袈裟なものはありません。あるのは、疲れだけ、ふかい疲れだけ。ほくの黄ばんだ肌の色のように濁り、湿り、おもく沈んだ疲労だけなのです。」といい、神を知らない日本人は「罪」の意識も持てないのだと訴える。そして「ふかい疲労」ばかりが自分を無気力にするのだと言う。それが遠藤の認識する日本人観といえぱそうであるが、この作品の重要なところは、そうした現状認識を示しただけでなく、さらにデュランに次のように語らせ、この作品は、「洋服の仕立て直し」への試みを開始しているところに、意義があろう。先の一二月一八日のデュランの日記に次の記述が続く。

布教以来十二年、今日はじめて私は異邦人の(つまり神を知らざりし者達の)倅せを知った。倅せかどうか、私は断言できない。だがキミコや昨日の千葉とよぶ青年たちの持つあの黄色人特有の細長い濁った眼の秘密だけはわかったような気がする。にぶい光沢をたたえた彼等の眼は死んだ小禽ここりの眼を思わせる。そのどんよりとした視線は私たち白人がなぜか不気味にさえ感ずる無感動なもの、非情なものがあるのだ。それは神と罪とに無感覚な眼であり、死にたいする無感動な眼だった。キミコが時々、唱える、あの「なんまいだ」は私たちの祈りのようなものではなく罪の無感覚に都合のよい呪文なのだ。

そして、クリスマスの午後、デュランは日記をブロウ神父に渡すよう託して自殺した。その日記を読んだ千葉が、作品の最後で次のようにブロウに書き送った言葉を示している。

爆撃が彼を殺したのではない。日記を僕に托した以上老人が自殺をしたような気がしてならぬのです。あの人がそのため貴方たちの神から、今、裁きをうけているか、それとも、裁きも罰もない黄いろい世界、疲れて目をつむるように、ただ、うつろな眠りに溶けこんだのか、しりません。だが、同じ白い人でもデュランさんのことならまだ、ぼく等には理解できるような気がします。しかし、貴方のように純白な世界ほどぼく等、黄いろい者たちから隔たつたものはない。それがこの手紙をしたためさせた、理由になるかもしれない。

デュランに「今日はじめて私は異邦人の（つまり神を知らざりし者達の）倅せを知つた」と言わせ、「キミコや昨日の千葉とよぶ青年たちの持つあの黄色人特有の細長い濁つた眼の秘密だけはわかつたような気がする」と感じさせ、千葉のほうにも「同じ白い人でもデュランさんのことならまだ、ぼく等には理解できるような気がします」と言わせる。この、ブロウ神父のような純白な世界は受け入れられないが、背教者デュランのことなら日本人の自分にも「理解できる」かもしれないということは何を示しているのか、長演拓磨氏は「デュランに促された千葉の内面に生じた『白い人と黄色い人の距離感』ゆえである」と指摘し、それはまた日本人の「神なき人間の悲惨」を訴える声でもあつたと述べている<sup>(2)</sup>。果たしてそうであろうか。おそらく千葉に、デュランのことなら「ぼく等には理解できるような気がする」と語らせたとき作者が千葉を通して見据えていたのは、神にそむき、ブロウを裏切り、その悔恨の重さに耐えきれず死を選んだ一人の人間としての苦悩の（真）であり、「白い人と黄色い人」の間にある溝を越えた、人間としての共感であり、デュランの絶望の対極に浮上する、人間の弱さゆえに不可欠な神の救いであつたといえよう。即ち、『黄色い人』を通して遠藤は、西洋人の神観に対する日本人の神観と罪意識において、どこまでも相容れないものとして断念するのではなく、人間としての視点に立つことで両者のあいだの通路を見つけることが出来るという

ことを示しているといえるのである。そこから遠藤は、「洋服の仕立て直し」を、厳格な西洋のキリスト教に対して、許しと癒しを基調にした「母なる神」、「弱者の論理を受け止める宗教」の提案の可能性追求を文学の課題としていくようになったといえよう。

## 註

(1) 『私にとって神とは』前掲書、一一―一二頁。

(2) 長濱拓磨『黄色い人』『作品論遠藤周作』笠井秋生、玉置邦雄編、双文社出版、二〇〇〇年一月、五二頁。

## 二二

そのような遠藤の「日本人に受容されるキリスト教」の提示という使命をテーマにした作品の中で、初期の代表作は『海と毒薬』であろう。この作品は、戦争末期に日本のある大学で起こったアメリカ兵の捕虜に対する生体解剖実験を施した実際の事件を扱っているが、遠藤はこの題材について、次のように述べている。

書きたいと思っていたテーマは前からあった。その材料には目ぼしをつけていた。私はすぐに汽車にのり、九州、福岡に行き、仕事の準備をはじめた。戦争中にこの大学医学部で起こった捕虜生体解剖事件を調べるためだった。私はその事件そのものを書く気持は毛頭なかった。私の内部にあるもので事件を変容させ、別の次元の世界に移しかえてみるつもりだった。<sup>(1)</sup>

このように遠藤は、「事件そのものを書く気持は毛頭なかった。私の内部にあるもので事件を変容させ、別の次元の世界に移しかえて」新しい小説を書くこうとした、と言っているように、この小説には、遠藤が日頃から考えている問題がテーマとなっている。そのことはまず第一章「海と毒薬」の中に示されている。作品はまず、新宿郊外の新興



住宅地に引越した「私」が、持病の気胸治療のため、勝呂という、腕はよいが何か陰気な雰囲気の医師に出会うところから始まる。一方、その町で出会った人たちは、すでに戦争の罪も責任も風化させ、すっかり無味乾燥な日常生活に埋没したような日々を過ごしていた。しかし、洋服屋のショーウィンドーの中のスフィックスの像をじっと覗き込んでいる勝呂医師はどこか暗い、人を寄せ付けない孤独と翳りを感じさせる。その勝呂に関心を抱かせられる「私」を通して作品は一人の人間の内奥に刻印されたぬぐい難い暗さに注意を集中させていく。しばらくして、結婚のためにF市に行った折りに、勝呂がかつて、九州の大学で起こった「捕虜生体解剖事件」に加わっていたことを知り、「私」が抱いた勝呂の不可思議な暗さがそのことと深く関わっていたことと、それを戦争の罪も責任も風化させ自慢話にさえ置き換えている人たちと対比させることで、作品が勝呂の内奥の有りようを見据えながら展開していることを明らかにしていくのである。

そして作品は「捕虜生体解剖事件」の生じた時間にバックしていき、その事件に関わった勝呂ともう一人の若い医師戸田を中心に展開する。二人は、内科教室の助教授に勧められて実験に参加したのだが、勝呂は結局その出来事の中間、手術室の隅にうずくまっただけでも出来なかつた。戸田は、助手として、実験に淡々と加わった。実験後の二人を次のように描写している。

勝呂は黙りこんだ。やがて彼は自分に言いかけでもするように、弱々しい声で、

「お前は強いなあ。俺あ……今日、手術室で眼をつむっておった。どう考えてよいんか、俺にはさっぱり今でも、わからん」

(中略)

「でも俺たち、いつか罰をうけるやろ」勝呂は急に体を近づけて囁いた。「え、そやないか。罰をうけても当り前やけんど」

「罰って世間の罰か。世間の罰だけじゃ、なにも変らんぜ」戸田はまた大きな欠伸をみせながら「俺もお前もこんな時代のこんな医学部にいたから捕虜を解剖しただけや。俺たちを罰する連中かて同じ立場におかれたら、どうなったかわからんぜ。世間の罰など、まずまず、そんなもんや」

だが言いようのない疲労感をおぼえて戸田は口を噤んだ。勝呂などに説明してもどうにもなるものではないという苦い諦めが胸に覆いかぶさってくる。「俺はもう下におりるぜ」

勝呂は「どう考えてよいんか、俺にはさっぱり今でも、わからん」と言い、苦しそうな表情をする。戸田は世間の罰は自覚するが「世間の罰だけじゃ、なにも変わらんぜ」と欠伸をしながら言う。しかしその戸田も「言いようのない疲労感をおぼえて」「口を噤ん」だ。従来この作品を通して、遠藤が日本人に於ける「罪意識の不在」<sup>(2)</sup>、「罪意識」の不在の不気味さ<sup>(3)</sup>を示した作品であるといった見方が多くなされてきた。確かに、冒頭での、戦争体験における罪が風化されている人たちに、根本的な罪意識の欠如をみることも可能であろう。しかし、戸田と勝呂が感じている「疲労感」「けだるさ」「苦しさ」といったものが重要であり、そこに遠藤は日本人の罪意識の可能性を示そうとしたのであろうと考えられるのである。そしてそれは、この作品の中の勝呂と戸田が屢々みる海の描写とも関わっている。端的なのは最後の勝呂と戸田が海を眺める場面である。

だが戸田は勝呂がそこだけ白く光っている海をじっと見詰めているのに気がついた。黒い波が押しよせては引く暗い音が、砂のようにももの憂く響いている。

「明日はまた、回診か」わざと欠伸をしながら、戸田はいかにも眠そうに呟いた。「ああ、しんど。ほんまに今日はしんどかったなあ」

勝呂が「黒い波」の「そこだけ白く光っている」一点を凝視しているのに対して、戸田は「黒い波が押しよせては引く暗い音」には気をとめるが、すぐに「わざと」欠伸をして日常のマンネリズムの中に自己を埋没させてしまおうと

する。

勝呂にとって「海」は、

屋上にでるたびに彼は時にはくるしいほど碧く光り、時には陰鬱に黝ずんだ海を眺める。すると勝呂は戦争のことも、あの大部屋のことも、毎日の空腹感も少しは忘れられるような気がする。

というように癒しと救いを与えるものであり、特に「海が碧く光っている日」には、

羊の雲の過ぎるとき

蒸気の雲が飛ぶ毎に

空よ おまえの散らすのは

白い いろいろな 綿の列

(空よ おまえの散らすのは 白い いろいろな 綿の列)

の詩句を眩き、「涙ぐみそうな気分」に誘われるのである。この詩句はすでに上総英郎氏が指摘しているように立原道造の「雲の祭日」と題したキリスト教の聖体拝受の儀式にヒントを得た詩であることから(4)、口ずさむ勝呂の「涙ぐみそうな気分」には、清純な慰めと癒しを得得している心情が推測できる。しかし、手術後の勝呂が、同じように屋上から海を眺めながら口ずさもうとしたときには、口の中が乾いて、眩くことができなかつた。佐藤泰正氏が「白く光る海」を見詰める勝呂の姿に、『罪と罰』の可能性を問わんとした作家の誠実」を指摘されている(5)が、特に、手術後の詩句を眩けない勝呂が、心の深奥で人間の罪と対峙している姿を推測することは十分可能であろう。そして、「黒い波」の「音」に胸騒ぎしながらも「わざと」日常のマンネリズムの中に埋没させてしまおうとした戸田もまた、罪意識がもたらす「黒い波」に不安を抱き始めているといえるのではないか。ちなみに勝呂に「雲の祭日」の詩を教えたのも戸田である。また、病院の構内でポプラの樹の下で黙々とシャベルを動かす老人の存在に注目して

「ポプラが死と再生のシンボルであり磔刑の十字架の材であったことを知れば、これが誰かは明白だ」と指摘した須波敏子氏の視点も重要であり<sup>(6)</sup>、換言すれば、この作品は遠藤の分身ともいえる勝呂と戸田を通して「罪意識の可能性」を示し、そのことを通して遠藤は、日本人におけるキリスト教受容の道を、確かなものとして提示しようとしていると考えることができるのである<sup>(7)</sup>。

## 註

- (1) 「出世作のころ」読売新聞夕刊、一九六八年二月五日―三日。『石の声』（一九七〇年、冬樹社）収録。
- (2) 武田友寿『遠藤周作の文学』聖文舎、一九七五年九月。
- (3) 佐古純一郎『椎名麟三と遠藤周作』日本基督教団出版局、一九七七年四月。
- (4) 上総英郎『遠藤周作論』春秋社、一九八七年十一月、七七頁。
- (5) 佐藤泰正『遠藤周作と椎名麟三』『佐藤泰正著作集』七卷、翰林書房、三七頁。
- (6) 須波敏子『海と毒葉』『国文学』学燈社、一九九三年九月、九四頁。
- (7) 拙稿『海と毒葉』において、作品が日本人における罪意識の可能性と、キリスト教受容の道を示した作品であるという立場で論じているので、参照下されば幸甚である。（『作品論 遠藤周作』笠井、玉置編、双文社出版、二〇〇〇年一月）

## 四

遠藤は、『海と毒葉』を書いてしばらくしてからいわゆる「軽小説」といわれている作品を書くようになる。その中でも特にすぐれているものが『おバカさん』（一九五九年）と『わたしが棄てた・女』（一九六三年）である。

まず『おバカさん』についてであるが、この作品は、ナポレオンの子孫だという不思議な外国人ガストン・ポナバルトが日本に来日するところから始まる。遠藤は、この人物を「自分のキリスト」であるといっている<sup>(1)</sup>し、彼はま

た中央公論社から出版された単行本（一九五九年）の「あとがき」で「一種の童話のような小説」としてこの作品を書いた、とも言っている。言い換えると、笠井秋生氏が「おバカさん」は、距離感のあるキリスト教をどうしたら身近なものに出来るかという問題意識に基づいて書かれた遠藤の最初の小説」と指摘しているように<sup>(2)</sup>、より身近なものとして、よりリラククスした形で、素直に、人間のやさしさや、隣人愛、ゆるし、といったものを描いて、キリスト教への道を示そうとしたのだらうということが感じられる作品である。例えば次の箇所である。

・ ガストンはこの老人たちにも、この老人の前にそつと手を出した今のねこ背の女にも、ふかい憐憫の情をおぼえていた。（略）ガードのむこうには昨夜のように無数の星がまたたいている。（あの星と同じ数だけの人間がこの地上に生きている）遠い海をわたったガストンにはこのことがよくわかるのだった。（あの星と同じ数だけの不幸や悲しみや辛さが地上にちらばっている……）

ガストンはそうした人間のためになにかをしたかった。不器用は不器用なりに、のろまはのろまなりに何かをしたかった。

・ 「おれがガスさんが好きなのはね……彼が意志のつよい、頭のいい男だからじゃないんだよ。弱虫で臆病のくせに……彼は彼なりに頑張ろうとしているからさ。おれには立派な聖人や英雄よりも……はるかにガスさんに親近感を持つね」

この作品ではガストンは最後に、人を助けようとして、かえって彼が沼に沈められてしまう。しかし、遠藤文学では、ガストンはその後『悲しみの歌』と『深い河』で再登場してくる。遠藤が愛した人物であり、遠藤にとつての信仰の証である「自分のキリスト」であるから、不死の人であり、遠藤が好んだイエス像、「同伴者イエス」としてキリストの愛を讀者に示し続ける存在であったといえよう。

『わたしが・棄てた・女』では、森田ミツという主人公が、遠藤の「自分のイエス」役を演じる。この作品は、集

団就職で上京した森田ミツが、ある雑誌の文通欄に投稿したことがきっかけで吉岡という青年に出会い、小児麻痺で足が不自由な吉岡に同情したミツが、吉岡に求められるままに肉体関係を持ち、捨てられるという展開が始まる。その後吉岡は会社に入り、ミツのことは考えない生活をしていく。ミツは、町工場から夜の仕事へと変わっていくが、ずっとあのときの吉岡の寂しそうな表情が忘れられず、気にかけて続ける。ある時、吉岡は自分の勝手な都合で、昔遊んだミツにもう一度会って、肉体関係を求めようと思ひ呼び出す。そのときミツの手の首に出来たアザを見て、恐ろしくなり医者に診せるように進めて、急いで逃げ去った。

大学病院でハンセン病と診断され隔離病院に入院させられることになったミツは、まさに「世の中から「見棄てられ」た」ような辛さと絶望感に襲われる。しかし、病院での精密検査の結果誤診とわかり、最初は喜んで病院を出て、御殿場の駅へ向かう。駅のベンチに座って考えていると、自分には帰る所なんて無いのだということが思い浮かぶ。再び病院へ戻った彼女は、ハンセン病に苦しむ人たちの世話を手伝うようになる。そして、ある日患者が大切に育てた卵を売りに町へ出かけて、車にはねられて死んでしまう。その彼女が最後まで口にしていたのが、吉岡の名前であり、それを聞いたシスターが吉岡に手紙を送りすべてを知らせた。その手紙を読んだ吉岡のことを作品では次のように記している。

(なんでもないじゃないか。)

ぼくは自分に言いきかせた。

(誰だって……男なら、することだから。俺だけじゃないさ。)

ぼくは、自分の気持ちに確証を与えるために、屋上の手すりに靠れて、黄昏の街を見つめた。灰色の雲の下に、無数のビルや家がある。ビルディングや家の間に無数の路がある。バスが走り、車がながれ、人々が歩きまわっている。そこには、数えきれない生活と人生がある。その数えきれない人生のなかで、ぼくのミツにしたような

ことは、男なら誰だつて一度は経験することだ。ぼくだけではない筈だ。しかし……しかし、この寂しさは、一体どこから来るのだろう。ぼくには今、小さいが手がたい幸福がある。その幸福を、ぼくはミツとの記憶のために、棄てようとは思わない。しかし、この寂しさはどこからくるのだろう。もし、ミツがぼくに何か教えたとするならば、それは、ぼくらの人生をたった一度でも横切るものは、そこに消すことのできぬ痕跡を残すということなのか。寂しさは、その痕跡からくるのだろうか。そして亦、もし、この修道女が信じている、神というものが本当にあるならば、神はそうした痕跡を通して、ぼくらに話しかけるのか。しかしこの寂しさは何処から来るのだろう。

かつて、「犬ころのように棄て」、ハンセン病をおそれ逃げ去った吉岡が、ミツの最期をきかされ、「この寂しさはどこから来るのだろうか」と感じているこの最後のことばに、作品のテーマが示されているといえよう。即ち、この「寂しさ」こそ吉岡に顕現された罪意識であり、「神はそうした痕跡を通して、ぼくらに話しかけるのか」という吉岡の眩きの中にこそ、キリスト教への通路を示そうとした作者の意図が読み取れるのである。この作品は、遠藤が御殿場の神山復生病院を訪れ、そこで実在の井深八重<sup>⑤</sup>に会い、彼女の人生を写し取るようにして森田ミツ像を描いた。そのミツをかつて犬ころのように棄てた吉岡は、この物語の回想のはじめの「ぼくの手記」<sup>④</sup>の最後に「理想の女というものが現代にあるとは誰も信じないが、ぼくは今あの女を聖女だと思っている……」と記している。遠藤祐氏は、この作品をミツの「自己聖化」にある<sup>④</sup>とし、川島秀一氏はミツに「復活」のイメージを見、「キリストのまなざし」を指摘している。川島氏は更に、この「まなざし」の中によりがえってくる「風景」のなかにこの作品の世界があると指摘している<sup>⑤</sup>。森田ミツを中心に作品を見た場合はこのような復活と聖化のテーマが取り上げられてくるのであるが、一方山根道公氏が、

この主人公のミツという名は、「海と毒薬」の阿部ミツとつながるもので、この小説の中で吉岡にとっての森

田ミツは「海と毒薬」の勝呂にとつての阿部ミツ、戸田にとつての佐野ミツと同様に、その女性と触れ合った者に罪の自覚をさせる存在であるということが出来る。<sup>(6)</sup>

と指摘しているように、「私が・棄てた」という作品のタイトルから想像しても、このミツを思い出してどうしようもない「寂しさ」を抱く吉岡を通して、作者は日本人における罪意識の可能性と、それゆえの救いを描こうとしたのではないかと考えることが出来る。

そのように、遠藤の文学は、一方でキリスト教と東洋、そして日本の精神風土との交わりがたさを示しているが、それよりも強い確信とカトリック作家としての使命感を持ってキリストの愛を讀者一人一人に実感させうるテーマを描き続けていった作家であるということが出来るよう。

## 註

(1) 「愛の男女不平等について」「婦人公論」一九六四年三月。遠藤は「ドストエフスキーは彼がもつとも理想的人間(つまりキリストにちかい男)を『白痴』という題で書きました。(略)私も自分のキリストを『おバカさん』という同じような題で小説にした」と書いている。

上総英郎氏は『十字架を背負ったピエロ——狐狸庵先生と遠藤周作——』(主婦の友社、一九八〇年一〇月)で、「ガストン・ボナバルトが遠藤氏のひそかに抱いたイエス像の原型であることは、ずっと後、『沈黙』から『死海のほとり』『イエスの生涯』に到って具体化されるイエスの姿、イエスの生きた軌跡と重ね合わせてみれば、明らかであります。」と指摘している。

(2) 笠井秋生「『おバカさん』論」『作品論遠藤周作』前掲書、九八頁。

(3) 井深八重(一九九七—一九八九)二三歳の時に腕に出来た湿疹をハンセン病と診断され、神山復生病院に隔離入院させられた後、誤診と分かった。その後病院に残り看護婦として働き、後にナイチンゲール賞を受賞した。彼女のことは、木村一信氏が「わたしが・棄てた・女」論(『作品論遠藤周作』双文社出版)に、井深自身の文章(「しばくさ」所収一九七五年同志社女子大学)、阿部志郎「井深八重」(『同志社時報』所収一九九六年)をふまえて紹介している。



- (4) 遠藤 祐『わたしが・棄てた・女』『遠藤周作の世界』朝日出版社、一九九七年九月。  
(5) 川島秀一『遠藤周作へ和解』の物語』和泉書院、二〇〇〇年九月、二二〇頁。  
(6) 山根道公『解題』『遠藤周作全集』第五卷、新潮社、一九九九年。

## 五

遠藤周作の代表作品である『沈黙』は、一九六六（昭和四一）年三月に新潮社の書き下ろし長編小説として出版された。作品は一六三八年、三人の宣教師を乗せた船がリスボンを発ち、途中マカオで一人が病気のため留まることになり、他の二人がひとりの日本人を水先案内人にして、長崎の五島に上陸したところから始まる。日本では、一六二二年にキリシタンの処刑が始まり、二九年には長崎で〈踏絵〉が始まる。そして三七年から三八年にかけて島原天草の乱が起こる。この乱のため、特に九州地方でのキリシタンへの弾圧がいつそう激化したその三八年の出来事である。国内に潜んでいた外国人の宣教師たちも、作中に登場する三人の宣教師達が尊敬しあがめてきたかつての師フレイラのように拷問によって棄教させられたり、或は棄教しない者は処刑された。そうした中で、導き手を失っていた日本人がいかに彼等を歓迎したかを作品では次のように示している。

五島の百姓と漁夫たちがどんなに司祭を待っていたかは、あの歯のかけた男が言う通りでした。どうしていいか、今わからないくらいです。眠る暇さえありません。彼等はキリスト基督教の禁制などはまるで無視したように、私のかくれ家に次から次へとやってくるのです。子供たちに洗礼コンシテツを授ける。大人たちの告悔コンシテツをきく。一日つぶしても、その人数はたえませぬ。まるで、砂漠の中を歩きつづけた隊商がやつとオアシスの水のみつけたように、彼等は私をむさぼり飲もうとしている。聖堂のかわりにしたこの潰れたような農家に彼等の体が充滿し、吐き気の

するような臭いのただよった口をちかづけて彼等は自分たちの罪を懺悔します。病人までが這うようにしてここまでやって来るのです。

遠藤は、江戸時代になって更に厳しい年貢の取立てと威圧に苦しむ弱者の農民、漁民たちが、唯一のよりどころとして神を求めていった彼らの信仰に寄り添い、その信仰までも奪っていく理不尽な弾圧を憤りながら、作品に取り組んでいったのである。

遠藤がこの作品を書くヒントをつかんだのは、江戸時代へ踏絵に用いられていたピエタの像をみたことによるのだということを次のように回想している。

長崎の大浦天主堂から少し登ったところに十六番館といってこの町の明治のころ、居留した異人の調度や長崎土産をならべている木造洋館がある。

そして心ひかぬその建物を五、六年前おとずれて外に出ようとした時、一つの踏絵が入口近くにおかれているを見た。厚い木に銅板の基督像キリストをはめこんだもので、私の注意はむしろ基督像よりは、周りの厚い木にかすかに残っている足指の痕にむけられた。

もちろんその黒ずんだ足指の痕は一人のものではない。この踏絵をふんだ無数の人間が長い歳月に残したものだらう。

だが東京に戻ってから、その踏絵と黒ずんだ足指とのイメージはしばしば心に甦った。一体、どういう信徒がこれを踏んだのか。踏んだ時、その信徒はどういう気持を持ったろうか、そしてもし自分が同じ状況下におかれた信徒の一人だったならば、踏絵の前にたたされて、どういう態度をとったろうかと考えた。

もちろん今の基督信者にはこうした踏絵の基督像は信仰の対象とはならぬ。しかし切支丹時代キリシタンの素朴な農民や漁民、町人たちにとってこの像を踏むことは、「お袋の顔」を踏むのと同じように切実な苦しみをひき起こした

にちがいないのだ。

(中略)

こうして切支丹の本を少しずつ読みながら、私の勉強はさきほどの三つの疑問にすべて、しばらくしていた。つまり、華々しく殉教した強者のことではなく、卑法さ、肉体の弱さ、死への恐怖、家族を助けたい一心で、遂に信念を捨て、踏絵に足をかけてしまった弱者たちに私の心は向けられたのである<sup>1)</sup>。

遠藤がこの踏絵のことを真剣に考えるようになったのは、一九六一(昭和三六)年、三度目の肺の手術後の入院中、この入院中に、数年前に長崎の一六番館で見た一枚の踏絵が心から離れず、黒ずんだ足指の痕のイメージがしばしば心よみがえったときのことだと別の文章で書いている。生命に関わる危険があるといわれた手術を受け、更には闘病生活を慰めてくれた九官鳥が手術中に死んで、自らが不安と弱気におそわれているなかで、かつてどうしようもなく踏絵を踏んでいった弱者達の姿が浮かんでくるようになって、やがてこの作品を書くきっかけになっていったということであろう。それゆえに、「一体、どういう信徒がこれを踏んだのか」「踏んだ時、その信徒はどういう気持を持ったろうか」「もし自分が同じ状況下におかれた信徒の一人だったならば、踏絵の前にたたされて、どういう態度をとったろうか」という三つの疑問、即ち、自分の中にも強く認識する「弱者」としての日本人が、キリスト教徒が徹底して迫害される時代においていったいどのように生きたのかという関心と、「卑法さ、肉体の弱さ、死への恐怖、家族を助けたい一心」ならば自分が信じ、理想とするキリストの顔をも踏んでいった「日本の精神風土」について真剣に考えるようになり、やがて『沈黙』となって結実していった、ということであろう。そして更に「もし自分が同じ状況におかれた信徒の一人だったなら」と考えているように、それは、単に古い江戸時代に起こった歴史的事出来事として捉えようとしたのではなく、現代においても通じる問題として取り組もうとしていた姿勢が窺えよう。弱者日本人の典型として遠藤が描いたのが宣教師たちを日本に案内したキチジローである。キチジローはかつて、

弱さゆえに裁きを恐れ踏絵を踏み、村に居れなくなつて国外へ逃げ出し、マカオをさまよつていたのだが、宣教師を連れてきたということで、とたんに英雄扱いされるようになる。武田友寿氏が指摘するように、遠藤はこのキチジローを通して作品の中心テーマを語らせている<sup>(2)</sup>。たとえば次の箇所である。

・「なんのために、こげん苦しみばテウスさまはおらになさつとやるか」それから彼は恨めしそうな眼を私にふりむけて言ったのです。「パードレ、おらたちあ、なあんも悪かことばしとらんとに」

聞き棄ててしまえば何でも臆病者のこの愚痴がなぜ鋭い針のようにこの胸にこんなに痛くつきさすのか。主はなんのために、これらみじめな百姓たちに、この日本人たちに迫害や拷問という試練をお与えになるのか。いいえ、キチジローが言いたいのはもつと別の怖ろしいことだったのです。それは神の沈黙ということ。迫害が起つて今日まで二十年、この日本の黒い土地に多くの信徒の呻きがみち、司祭の熱い血が流れ、教会の塔が崩れていくのに、神は自分にささげられた余りにもむごい犠牲を前にして、なお黙つていられる。キチジローの愚痴にはその問いがふくまれていたような気が私にはしてならない。

・「モキチは強か。俺<sup>おい</sup>らが植える強か苗のごと強か。だが、弱か苗はどげん<sup>こや</sup>肥し<sup>こや</sup>ばやつても育ちも悪う実も結ばん。俺のごと生まれつき根性の弱か者は、パードレ、この苗のごたるとです」

佐藤泰正氏は作品の一つの軸に「へ神の沈黙」と歴史のなかに沈黙をしいられたへ弱者の復権という問題」があると指摘している<sup>(3)</sup>。「弱者」キチジロー達には「愚痴」でしか言う術を与えられない「神の沈黙」の問題、それはフエレイラの棄教としてもロドリゴに突きつけられる。

「(略) 私が転んだのは、穴に吊られたからではない。三日間……このわしは、汚物をつめこんだ穴の中で逆さになり、しかし一言も神を裏切る言葉を言わなかったぞ」(略)

「わしが転んだのはな、いいか。聞きなさい。そのあとでここに入れられ耳にしたあの声に、神が何ひとつ、な

さらなかつたからだ。わしは必死で神に祈ったが、神は何もしなかつたからだ」

この神の「沈黙の問題」は、早くに『黄色い人』において日本人キミ子と棄教したデュランとの間の会話、「なぜ、神さまのことや教会のことが忘れられへんの。忘れればええやないの。(略)なんまいだといえよそれで許してくれる仏さまの方がどれほどいいか、わからへん。」に通底している。即ち、「必死で神に祈ったが、神はなにもしなかつた」は汎神風土日本における神への求めと断念を指している。それはフェレイラがロドリゴに語った日本人観に通じる。

「この国は沼地だ。やがてお前にもわかるだろうな。この国は考えていたより、もっと怖ろしい沼地だった。どんな苗もその沼地に植えられれば、根が腐りはじめる。葉が黄ばみ枯れていく。(略)」

日本への宣教に懸命に尽くしてきたフェレイラに痛恨させたこの日本「沼地」観、『沈黙』は一旦はこの汎神風土と一神風土の断絶の前に立ち止まる。しかし、遠藤は『沈黙』のテーマはそこにとどまるものではないということを『沈黙』発表直後の「福音と世界」の座談会で次のように述べている。

私はないないづくしにはもう耐えられない。たとい間違っている、何とか踏み石を置いてこれで渡ってみて、それでもだめならまた別の踏み石を置くということは今われわれがやらなければ、次の世代にバトンを渡せないように思う<sup>(4)</sup> (略)

「沼地」日本に痛恨と断念をもって立ち止まるのではなく、それを超えていくキリスト教受容の可能性の模索、遠藤は『沈黙』の主題をこのように設定していることをうかがわせる発言である。キチジローたちが訴えた「神の沈黙」をかつてロドリゴ達若い宣教師の鏡のような存在であったフェレイラに語らせていることも注目しなければならぬ。更に言えば、「神の沈黙」への問いかけはロドリゴにおいてもなされている。日本の信者が死ぬたびに「なぜ、あなたは黙っている。」と問いかけてきた彼の疑問は、ともに海を渡ってきたガルベが処刑される場面で明確にな

る。「あなたはなぜ黙っているのです。この時でさえ黙っているのですか。」「どうかこれらすべてをガルベと私のせいにしないで下さい。それはあなたが負わねばならぬ責任だ。」と「沈黙」に対して強い疑問を投げるようになっていくのである。即ち、「神の沈黙」への問いが、キチジローが自らの弱者の正当化として訴えてきた範囲を越えて、宗教の根本への問いかけとなつていくことに注目しなければならぬ。佐藤氏が「神の沈黙」ともう一つの問題としてあげた「弱者」の復権、これは武田友寿氏以来指摘されてきている視点であるが、単にキチジロー達弱者の救済というだけのレベルではなく、フェレイラ・ロドリゴも含めた形で「神の沈黙」への訴えを作品の中心課題として問おうとしている視点に重ねてこの「復権」について言うことにおいてこの問題はより重みを増すであろう。

そして、この「神の沈黙」を問うという視点が、従来のキリスト教信仰への問いかけという枠を超えていたことを作者自身が認識していたであろうことは次の場面が推測させる。

「お前は今まで誰もしなかつた最も大きな愛の行為をやるのだから……」ふたたびフェレイラは先程と同じ言葉を司祭の耳もとに甘く囁いた。「教会の聖職者たちはお前を裁くだらう。わしを裁いたようにお前は彼等から追われるだらう。だが教会よりも、布教よりも、もつと大きなものがある。お前が今やろうとするのは……」

「教会よりも、布教よりも、もつと大きなもの」、ロドリゴ、フェレイラ、そしてキチジローを通して「神の沈黙」を問うてきた『沈黙』は実はこの一点に視点を凝集させた作品であるといえるのである。例えば、遠藤は佐藤泰正氏との対談のなかで次のように述べている。

まったく同感です。そういう意味で「沈黙」という言葉を表層的にとると、たしかに神の「沈黙」になります。が、あの小説にも書いてあるように「神は沈黙しているのではない。私の生涯をとおして語りかけているんだ」という、つまり「沈黙」という表層的な形態をとっているけれども、その奥に神のささやきがある、語りかけがあるということと、背中合わせにして「沈黙」というのは出来ています。単に神は人間の苦しみに対して黙

っているのだという「ロドリゴの問いかけ」私の考え方」というふうには、あの小説は読んでほしくないというのが作者の希望です。<sup>(5)</sup>

踏絵を踏んだあとのロドリゴは、井上筑後守に「いいえ私が闘ったのは」「自分の心にある切支丹の教えでござりました」と答えた。それはかつて強い意志に燃えて日本へ布教に来たときに心に抱いていた「切支丹の教え」から、踏絵を踏むにいたるロドリゴの信仰への葛藤の経緯を指している。そして、引用の作者の言葉は、その踏絵を踏んだあとのロドリゴの心境を示した「あの人は沈黙していたのではなかった。」「私の今日までの人生があの人について語っていた。」と重なる。山根道公氏は、このロドリゴの変化を「母性的なキリストに出会う信仰体験の深まり」と指摘している<sup>(6)</sup>。遠藤自身「母性的信仰」を繰り返して述べてきている点からも、山根氏の指摘は的確であるが、ただしその「母性的」が意味するところを、ロドリゴもフェレイラも神の沈黙を懐疑する『沈黙』においては、西洋の「父性的」に対峙させて問おうとしているのではないことは注目しておくかなければならない。遠藤は作家としての出発のときに「カトリック作家の問題」において「カトリック作家は作家である以上、何よりも人間を凝視するのが義務」であると語った。ロドリゴの心境をこのことと合わせてみるなら、彼は、日本におけるキリスト教信仰の可能性を希求する根底においてこの「人間凝視」を一貫させていたことが窺える。即ち、西洋と東洋といった民族による精神風土の違いはあるが、そのことを超えて、「人間」と「神」との対峙において信仰は普遍的真理であると告げているといえよう<sup>(7)</sup>。そして、その普遍的視点に立って日本人におけるキリスト教信仰の可能性にも力強い核心を示したということが出来るのである。

それを知らずものとして、巻末に「切支丹屋敷役人日記」を付け加えたのだと考えられる。「切支丹屋敷」とは、徳川幕府がキリシタンを收容するために江戸の小石川に作った施設であるが、そこに、処刑された岡田三右衛門という武士の名前と妻をあてがわれ、フェレイラが自分にしたと同じ、捕らえられた宣教師を棄教に導く仕事をさせられ

ているロドリゴとその三右衛門が連れている中間吉次郎が描かれているが、この二人がロドリゴとキチジローであることは容易に分る。そして彼らが密かにキリスト教を信仰していたことが推察されるように描かれている。遠藤が対談で「切支丹屋敷」も大切なんです」と語ったことがあった<sup>(8)</sup>が、踏絵を踏んだロドリゴにも、繰り返し踏絵を踏んで逃げてばかりいたキチジローにもその内面において、信仰そのものがしっかりと守られていることで、遠藤は真のキリスト教信仰の姿と、キリスト教信仰の可能性について確信を持って示そうとしたのだということが言えるのである。

## 註

- (1) 『沈黙』踏絵が育てた想像」朝日新聞」一九六七年八月二十五日。
- (2) 武田友寿『遠藤周作の世界』中央出版社、一九六九年一〇月。
- (3) 佐藤泰正『鑑賞日本現代文学25 椎名麟三・遠藤周作』角川書店、一九八三年二月、四一〇頁。
- (4) 「座談会 神の沈黙と人間の証言——遠藤周作『沈黙』の問題をめぐって——」『福音と世界』新教出版社、一九六六年九月、六五頁。
- (5) 「人生の同伴者 遠藤周作 聞き手佐藤泰正」春秋社、一九九一年十一月。
- (6) 山根道公『遠藤周作 その人生と『沈黙』の真実』朝文社、二〇〇五年三月、四〇七頁。
- (7) 遠藤は「座談会 神の沈黙と人間の証言——遠藤周作『沈黙』の問題をめぐって——」(前掲)において、「神は、われわれ人間の人生、もしくは、人間そのものを通して、その存在を語り、その言葉を語っている、どんなつまらない人間の人生にも神はその存在の証明をしている」と述べている。
- (8) 対談「国文学」学燈社、一九七三年二月。